

目的 活力ある高齢社会とは、「高齢者自身も積極的生活態度を持っていきいきと生きる社会である」という観点から、社会的環境の異なる地域における事例研究のひとつとして第一報では米国を選んだ。公的福祉の基盤が弱いとされる米国において、積極的な生活態度を持って生きる高齢者の、主体的な生活対応による要因、および高齢者を取りまく地域社会環境による要因の両面から「高齢者にとって意義ある生活をもたらすものは何か」のてがかりを得る事を目的にして検討する。

方法 1993年11月、米国ワシントンにある2つの組織「(AARP)全米退職者協会」および「(IONA)高齢者の自立と機会の為のネットワーク」を訪問し、高齢者の組織活動を調査した。さらに組織に所属し、積極的生活態度を持つと思われる個人(65~90歳の女性5名、男性2名)に生活歴や現在の生活に関する質問を行った。

結果 調査事例に共通する事で「高齢者にとって意義ある生活をもたらすものは何か」のてがかりになるとと思われる事は次の様な事である。日常生活・経済生活ともに自立している。無病息災または一病息災。孤独ではなく人との交流が豊かにある。社会参加をしている。「人の役にたつことをする」をMOTTOとしボランティア活動などを行っている。自分が人びとの生活に役だっているという意識を持っている。生活態度は明るく前向きで積極的に行動する。新しいことに挑戦する意欲がある。これからしたいことが沢山ある。インテリアや服装のコーディネートが好きである。AARP, IONA が組織的に高齢者の自助努力と相互助力のための支援を行っており、生きがいのある生活のための機会を用意している。